

少女期の紫の上

— 清新な子ども描写から新枕の衝撃へ —

田辺玲子

本稿は、『源氏物語』中の子どもの描写中で、もっとも評価の高く分量も多い紫の上の「子どもらしさ」の描写の特質を明らかにし、物語中で果たした役割および効果を考え、更に新枕を契機として、その無邪気がいかにして喪失したのかを考察してみたい。おもに「若紫」の登場時から「葵」の新枕までの紫の上を取り扱うことにする。

紫の上に関しては、その生涯にわたり多くのすぐれた論があることは承知の上であるが、その新枕描写の独自性に関する読みが意外に少なく源氏（男性）からの視点にやや偏っている印象を抱いた。性に関することがらだけに、あまり立ち入った読みを展開するのが憚られるという点が影響したのであろうか。しかし、同時代の物語中でも類を見ない特殊な描写であり、その新鮮さは明治期に樋口一葉の『たけくらべ』で見事に再生産される（注1）という普遍性を持っていたとも考えられる。

なお、「若紫」で紫の上の呼称を用いることは、厳密に言えば正しくないが、便宜的にこの呼称で統一する。引用した源氏物語の本文は小学館古典文学全集による。括弧内に巻名と頁数を示した。また、傍線は筆者によるものである。

一 「子どもの中の子ども」としての登場

私は以前、修士論文で光源氏の子どもの時代の特徴を検討したのだが、

その第一の特徴は、彼が「大人の中の子ども」として成長したということであった（注2）。そのことと比較して考えると源氏が北山で出会った紫の上は「子どもの中の子ども」として登場したといえる。紫の上初登場の次の場面はあまりにも有名である。

きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出入り遊ぶ。中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て、走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えて美しげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。（尼君）「何ごとぞや。童べと腹立ちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるところあれば、子なめりと見たまふ。（紫の上）「雀の子を犬君が逃がしつる。伏籠の中に籠めたりつるものを」とていと口惜しと思へり。（若紫二八〇）

仲田庸幸氏はこの部分を「光君には絶えてなかった子どもの遊んでいる場面である。『子ども』という立場からは、源氏物語中、最もすぐれた場面―子どもの主体性も遊びも尊重した具体的な表現であるこのあたりは、文学一般としても、子どもの興味を呼ぶ文学としても、殊に紫式部の子どもの観として、異彩を放っているところと言わざるを得ない」（注3）と、絶賛している。誰しも概ね異論のない評価であろう。

一方、林田孝和氏は「こんな登場の仕方をする主人公は源氏では、この女性一人であり―紫の上の『おくて』の在り方こそは、その人が神の子であることを意味する」と述べている（注4）。原岡文子氏は林田氏の説を引きつつ、「神の子の無垢と共に、その荒ぶる力、或いは秩序に組み込まれない原初の力」を、この紫の上登場場面にみてる（注5）。原文の傍線を施した部分からわかるように、紫の上は、複数の「童べ」

とともに登場し、子どもたちの遊びの世界から飛び出してきた子どもとして突如、源氏の視界に入ってきた。

ところで、折口信夫に「貴族の子では、その子と一緒に育って、おとぎをする役の子供がある―遊び友達でなく、少しでも年が上で、側に置いていて、その子の世話をする―その子が次第に立派な男女になるように導いてゆく」(注6)という説がある。源氏の子ども時代にはそのような子どもの存在は表面に書かれていなかったが、紫の上の周囲にいる童べはこの種のもののだろうか。他には『宇津保物語』の「楼の上・下」で、楼に移った大宮の周囲にも同年代の少女たちが一緒に付いて行ったように書いてある。また、『狭衣物語』の飛鳥井の姫宮(四歳)の周辺にも多数の少女がいたことが書いてある。

(狭衣が)ほのかなる穴よりのぞきたまへば、八つ、九つ、十ばかりなる、またそれよりも幼きなど、つぎつぎあまたがなかに(新潮古典集成『狭衣物語・下』一〇四)

もっとも『狭衣物語』は『源氏物語』を「積極的に取り込んだ物語」

(集成『狭衣物語』解説鈴木一雄)と言われている、この飛鳥井の姫宮をのぞき見る場面も「若紫」を模したものとされているので、証拠としての資料にはならないかもしれない。だが、「子どもの中の子ども」世界を形成する環境が存在していたらしいことと、式部がそうした環境に育った子どもとして紫の上を描いたことを一応おさえておきたい。

二 いはけなき田鶴の一声―紫の上のおしゃべり―

「桐壺」での源氏はいかに一度もその肉声を読者に聞かせる場面はなかった。しかし、紫の上は登場と同時に「雀の子を犬君が逃がしつる。

思してのたまふ。いとをかしと聞いたまへど、人々の苦しと思ひたれば、聞かぬやうにて、まめやかなる御とぶらひ聞こえおきたまひて帰りましたまひぬ。(若紫三二二)

源氏は、自分が育った宮中ではこんなあけつひろげで率直な物言いは聞いたことがなかったであろう。紫の上の周りの大人たちは宮中の人々と本質的には同類で、子どもの筒抜けのセリフに困惑している。その困りようも源氏には手にとるように理解できる。源氏は本音をストレートに口にしないのがマナーとされる後宮の大人社会に育ったので、紫の上の言動に驚きつつも、新鮮な感動を覚えている。そして翌日の文に「いはけなき田鶴の一声聞きしより葦間になづむ舟ぞえならぬ/同じ人にや」と「ことさら幼く書」いたとある。源氏は自分から紫の上の世界に接近しようとしているのである。

三 「男君」と「遊びがたき」と「親代わり」の一人三役

源氏が、全く唐突に紫の上に取りに強い執着を示すさまを、周囲から不審がられるのは無理もない。藤壺との秘事を明かさなければ、周りの人間が理解できないのは当然である。倉田実氏はこの点を「光源氏の意図を拒む北山の僧都等に代表される世俗の常識的存在は十分に予想される」とし、「世俗の抵抗にあった光源氏」が、求婚和歌を詠み重ねることによって自己の異常ともみえる願望を果たそうとするという見方をしている(注7)。以下、倉田氏のいう「世俗の抵抗」を追ってみる。

源氏も最初は尼君の兄である北山の僧都に結婚という線で切り出している。しかし、僧都の返事は「まだむげにいはけなきほどにはべるめれば、戯れにても御覧じがたくや」(若紫二八八)と、素っ気ないもので

伏籠の中に籠めたりつるものを」(若紫二八〇)と、子どもにとっての重大事件を祖母尼に息せききって報告するさまが、直接話法で描かれている。この初セリフは、物語のヒロインのそれとしてはあまりにたわいない。しかし「いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌」(前同)でありながら、自分では全くそのことを自覚しておらず、雀のことで泣き顔(「顔はいと赤くすりなし」とある)になっている少女の清新な美は源氏には強烈な印象を与えた。ここでの源氏は、「単にその美しさによってひきつけられたのではない。実情はこの少女が藤壺に似ていたからであった」(全集頭注)とするのは、本文からも読み取れて、誰しも納得する点である。しかし私はもう一点付け加えるべきこととして、源氏が紫の上のくもし出す「子どもの世界の空気」に、無意識に引きつけられたことをあげたい。源氏は紫の上を手元に引取りたいと考える理由として自分では「かの人の御かはりに明け暮れの慰めにも見ばや」(若紫二八四)「いかにかまへて、ただ心やすく迎へ取りて明け暮れの慰めに見ん」(若紫三〇一)と、繰り返して思っている。この「明け暮れの慰め」が具体的にどのような内容をさしていたのを検討すると、紫の上が持っている「子どもの世界を共有」することにつながるだろうか。源氏は紫の上の素性を知りますます彼女に執着するが、その時点で藤壺の代わりの存在を期待しているわけではなく、少女の下心や作為のひとつかからない無邪気な言動に惹き付けられているのだと思う。源氏が次に直接聞いた紫の上のセリフはいなく彼を喜ばせている。

(紫の上)「上こそ。この寺にありし、源氏の君こそおはしたなれ。など見たまはぬ」とのたまふを、人々いとかたはらいたしと思ひて、「あなかも」と聞こゆ。(紫の上)「いさ、見しかば心地のあしき慰みき、とのたまひしかばぞかし」と、かしこきこと聞こえたりと

あった。次に源氏は尼君に交渉した。彼は結婚の線話を進める不利を前回思い知ったので、作戦を変更した。今回採ったのは「かの過ぎたまひにけむ御かはりに思はないてむや」(若紫二九二)と、亡くなった紫の上の母親の代理志願であった。(父親兵部卿は生きていたので、父親代わりとはいえない。この後も源氏の意識の中では、常に紫の上に対しては母性的心情が働いている点に注意)源氏は更なる効果的な一押しとして、自分も幼くして母と死別した点を語り、祖母尼たちの警戒心を解こうとする。しかし、尼君の反応も僧都と大差ないものであった。紫の上がいまだ幼すぎて話にならないと断られてしまったのである。

ところで、この「親代わり」という申込方は桐壺帝が藤壺を要請する時にも使った方法であった。「ただわが女御子たちの同じつらに思ひきこえむ」(桐壺一一八)。いわば体のよい口実で、実際は男女の関係を結ぶことになることは双方とも暗黙の了解であったらしい。尼君ははじめからそのことを見抜いて断ったのであろう。この後も僧都との会話の折り、尼君はこの話について「いま四五年を過ぐしてこそは、ともかくも」(若紫二九六)と語り、源氏の性急な希望はかなえられそうもない。しかし、尼君が亡くなり、紫の上が父の元に引き取られる話が具体化しはじめると、源氏の立場は急に有利になった。乳母の少納言は継母北の方の元に紫の上を行かせることを決めている。かと言って源氏の申し出にもなかなか協力しようとはしない。

柳井滋氏はここを次のように解釈している。「(紫の上が)実際の年令よりも子どもじみてることがことをむずかしくしている。子どもじみていなければ、乳母も源氏とただちに結婚することが望ましいことであつた」(注8)。ここで我々は、作者がくどいほど紫の上が年令のわりに幼いこと―それも男女の関係を結ぶという点で―を強調しているこ

とがひとつの重要な布石になっていることを意識しておく必要があろう。その後ついに、源氏は父兵部卿の先手を打って、紫の上を二条院に連れ出すというやや乱暴な手を使って念願を果たした。そこから始まる二人の関係は常識的な見方をすれば、異常としかいいようのない不思議で希有なものであった。源氏が紫の上に対してとった態度は、ある時は、(実質的な夫婦生活は伴っていないとはいえず)結婚相手の「男君」のものであり、また母や祖母と死別した子の「親代わり」であり、そして、紫の上自身にとっては新しい素敵な「遊びがたき」でもあった。そしてこの本来全く別物であるはずの三要素が源氏と紫の上の関係においては渾然一体となって、ごく自然にその時々表情を見せながら流れていくのである。この点に関して永井和子氏も「紫上は第一部では妻と娘としての二重の存在であった」と述べている(注9)。紫の上と源氏は離遊びや物語絵の世界に入り込んで遊ぶというのが、二人の基本的日常である。無論、その中で源氏は自分の理想の女性としての教育も少しずつ行っている(手習いや、和歌、箏の琴など)。仲田氏は次のように言っている。「彼女が彼に本当になつくようになるのは、彼が直接彼女の遊び相手になったからであって、殊に彼は彼女の遊びの世界に降りていつて、紫の君は遊ぶ相手を得て子どもらしく純粋に遊ぶ場面を描いているのである。まことにすぐれた着想であり、描写といわねばならぬ」(注3)。紫の上がとびっきりの遊び相手を得て、単純に大喜びしている点はまさに氏の指摘の通りだと思ふ。しかし、源氏の方も紫の上ほど純粋にはなくとも、やはり遊んであげているだけでなく、子どもの世界で呼吸することに新鮮な喜びと解放感を味わっていたのではなからうか。後に「若菜上」で女三の宮を迎えた四十歳の源氏が女三の宮の幼稚さに幻滅し、うんざりした描写とは相当開きがある。紫の上の本来持っている

た子どもとしてのエネルギーは抜群で、憂いを知った大人(といっても「若菜」十八歳の源氏はまだ若くみずみずしいのだが)を、子どもの遊びの世界に引きずり込むパワーがあったのであろう。原岡氏は、それを「童鬼神としての無垢と反秩序的な力」(注10)ととらえている。更にいえば、自身は無邪気な子ども同士の遊びの時間を持たずに成長した源氏は、遊んでやっているというポーズをとっているが、心底遊んでいたからこそ、紫の上の気持をとらえることができたのではないかと考えられる。

繰り返し描かれている紫の上の離遊びと絵については川名淳子氏に次のような論がある。

当時時絵や雛に興ずることは少女期の極めて日常的な遊びで、そういった意味でこれは心晴れない状況にいる源氏の精神的逃避の場に格好の道具立てであり、源氏と若菜の君の平穩な日々の象徴であるといえる。と共に一方ではこれらは、若菜の無邪気さ幼さの十二分な演出となっている。彼女が女主人公の一角を占める時期はゆくりやってくるのが望ましい。和歌、書、楽の習得は、当人の社会性のある精神面の発達の度合いや個性を色濃く表出してしまうため、畢竟若菜の場合は最小限に抑さえられてしまうのである。紫の上の少女時代に繰り返される絵や離遊びの設定に、私はまずは右のような紫式部の作為を窺うのであるが(注11)。

物語の展開上からの要請に基づく、紫の上の無邪気さの描写の読み取り方として興味深い説であると思う。そして、紫の上と源氏の関係を離遊びや絵に興ずる次元にぎりぎりまでとどめておく作者の狙いを意識しておく必要がある。

また、原岡氏は紫の上のおくてぶりを次のように解説している。

即ち、いとけなく無邪気な、まことに子供供した紫の君への、周囲の人々の目にはすべて異様に映る源氏の思慕を強調することによって藤壺への思いの深さ、ものに憑かれたような冥さを浮き彫りにしていると思われるのである(注12)。

原岡氏の見方は、紫の上の無邪気さの執拗な繰返しは、そのことを強調することだけに作者のねらいがあるのではなく、深層に秘められた源氏の藤壺思慕を浮かび上がらせる効果を計算していることであらう。少女の無邪気と源氏の禁忌の恋情の二重構造の鋭い指摘であると思う。「若菜」が、少女の底抜けの澄明さと、それとは対照的な大人の男女の息苦しい世界を交互に描いた巻であることは諸氏によって指摘されている。紫の上の無邪気さも、藤壺との出口のない狂おしい関係や、葵の上との政略結婚の味気なさが吹き出したような夫婦関係との対比によって初めて、真に生命を吹き込まれているという性質のものであろう。

また、紫の上と薫が子ども描写の双璧(注3)といわれているが、両者に共通しているのは、一方に大人の暗い秘密の世界が存在している点である。「源氏物語」における子どもの無邪気さの描写の特徴とはこのようなものである。

四 『宇津保物語』の描写と『源氏物語』における進境ぶり

『宇津保物語』「楼の上(下)」に次のような犬宮の描写がある。

かくて、檀の色いとをかしくなりゆくを見給うて、(犬宮)「宮の
もかくやらむ。(父君は)宮見たてまつり給へるか。恋しうとも念
ぜよと(母宮は)宣ひしを、今は忘れやし給ひぬらむ。御文も賜
へかし」と宣ふままに泣き給ひぬれば(略)大将、督のおとど

も、折しも心細くなりゆくに、涙落ちて、事の心教へたてまつり給ふ。泣き給ふけしきを犬宮「まろを宣へど、(父君も)宮恋しくおぼえ給ふべかめり。母宮も泣き給ふか。」と尚侍に聞こえ給へば、皆いとをかしくなりたまひぬ。(『宇津保物語本文と索引』一八〇〇(三))

野口元大氏はこの部分を次のように解説している。

この犬宮はけっして琴の道の権化のような超自然的存在ではない。自分の立場を理解し、音楽を愛し、その習練に専心する決意はしているものの、やはり折りにふれて母が恋しく涙をこぼす少女である。またこの犬宮をなだめる仲忠の口調、すぐ後からおませな犬宮の言葉に一同の気分が一新して笑いが湧くさまなど、いかにも身近な日常性が語られ(略)(注13)。

私は、『源氏物語』以前にも、既にこのような自然な子どもの描写があったことに新鮮な驚きを感じた。犬宮は離遊びをする場面も多く書かれていて、紫の上の描写の先行例と見ることが可能であらう。ただし、犬宮は、母女一宮と楼に行く前に一日中離遊びをしたように、(女一宮「久しう見奉らざらむを」とて、あけぬれば暮るるまで、犬宮ひな遊びし給ふ)実の母に愛される幸福な少女として描かれていて、実質的には孤児同然になった紫の上が源氏と離遊びに興ずる如き特異な設定ではない。また、年令的にも「楼の上」で七歳であり、紫上の十ばかり(十二歳とする説も藤井貞和氏にある(注14))とは、やや開きがある。紫の上が当時の女子としては年の割りに幼稚すぎる設定であるのと異なり、犬宮は寧ろ年よりおませな少女として描かれている。ともあれ、『源氏物語』以前の作で、しかも確実に式部が意識していた作品にこのような写実的な子どもの描写が見られることは注目し値する。また、会話の多い

のが『宇津保物語』の特徴の一つだが、子どもの無邪気さの描写にはこの手法は甚だ効果的である。紫の上の生き生きとしたセリフの先蹤として『宇津保物語』「楼の上」の犬宮をあげておきたい。

五 女たちの中の子ども―初期紫の上造型のとらえかた―

先に「若紫」の紫上を「子どもの中の子ども」として登場したと評したのだが、「末摘花」「紅葉賀」「花宴」「葵」と、新枕にいたるまでの紫の上を追っていくうちに、源氏と関わり合う「女たちの中の子ども」としての紫の上が浮かび上がってくる。

ざっと名前を列挙してみると、直接には藤壺、葵の上、末摘花、六条御息所、源氏、朝顔の姫君、朧月夜が登場し、又、空蟬、軒端萩が源氏の心中に去来し、源氏と様々に関わり合っている。また、死後とはいえ、夕顔の面影も源氏の心中には強く存在している。

ここで注意すべき点は、「若紫」を別格として除くと紫の上の描写が意外に少なく、むしろ物語の傍流にすぎない描き方をされている部分が多いということである。この点に最初に着目したのは松尾聰氏の「紫上―一つのやゝ奇矯なる試論」(注15)であろう。松尾氏は次のように疑問を投げかけている。

若し末摘花巻以後に於ても紫上なる女性が女主人公でありしかも作者の理想とする女性であるなら、その女性に対する作者の描写は他の女性群像を描くを超えて、筆に於ては遙かに精細に、意欲に於ては遙かに情熱的であるべきがまづ自然ではなからうか。しかしながら事實は必ずしもさうではない。

松尾氏は右の疑問の解答として次の二点をあげている。

質のものであることは否めない。反対に、源氏と紫の上の登場する場面は一見、両極端な印象を与えるのだが、物語が要請しているのは案外類似の性質のものではないかという指摘がある(注17)。即ちどちらもメインの話の息苦しさをとまどぐす役目を果たしているのではないかという見方である。「紅葉賀」以降の紫の上は「女たちの中の子ども」として、未来の女主人公の前段階の姿を讀者にアピールしつつも、脇役的描かれ方にとどまってしまったとする読みは、それはそれとして説得力を持ち、ほぼ定説化している感がある。

しかし、反論もある。大朝雄二氏は秋山説に疑念を抱き「第二部若菜巻の紫上はあらゆる点で第一部の紫上像を引き継ぎ、そこに何らの修整も補強も行われることがないという現象」(注18)を指摘する。また倉田実氏は1の松尾説に対しては「描写の量よりも描かれた内実をどう評価していくかが問題」(注19)とし、3の秋山説に対しては「物語が関心を示したのは紫の上の成長発展する姿ではなく、源氏がいかに紫の上に関わっていったかというその関係性であった」(前同)と主張する。

大朝、倉田両氏の初期紫の上造型に関する読みは十分傾聴に値すると感ずる。「若菜上」を境として作品世界もヒロイン紫の上も質的に大きく変貌を遂げた、とする見方が大勢をしめているようだが、紫の上描写に関して第一部と二部にまたがっている要素は全くないのであろうか。少女期の紫の上が源氏と過ごした二条院での時間の積み重ねを、他の女たちとのドラマチックな出来事の間にはさむことによって、紫の上の無垢な世界が確固たるものとして読者には確認されていく。紫の上は自分が藤壺の身代わりであることも、源氏がやがて自分を女として遇するつもりであることも知らぬままである。第二部では女三の宮降嫁を頂点として二人の心の溝は深まり、真に回復することはないのだが、既に

1、作者がこの物語に統一あるひとつの長編物語たる形貌を与へしめむが為、光源氏をめぐる多くの女性を、すべて一応紫上に結んだ。(略)実は性格的にも行動的にも描かれ足りてゐない。

2、また、紫上は他の女性達と違って、源氏が源氏自身の儘になる様に育てあげた女性なのだから、源氏は、儘ならぬ事によって紫上に對する情熱を燃やすといふ機会もなく、従つて紫上に對する源氏の恋はいつも波瀾のない水の如き静けさを持して描かれ勝ちであるといふ事情もある(略)。

松尾氏の説をさらに発展深化させたのが秋山虔氏である。秋山氏はとくに松尾氏の右記の2の点を追求して次のように述べている。

3、紫上は、「若紫」巻北山のくだりで、はじめて物語の世界に登場した、あの無邪気な初々しさをそれが身上のように保持しつづける。光源氏が二条院の外の世界で何をし、どういう問題にぶち当たっているか、というようなことには、終始まるきり無関心であるしまた光とても、二人の関係の中には、彼の生活にきびしくさしこんできているはずの政治的世界の矛盾葛藤など絶対に持ち込むことはなかった―いわば紫上は光の意のままにあやつられる美しい人形である以外はないのである(注16)。

「源氏物語」は、元より児童文学ではないのであるから子どもの清新な描写を主眼とした場面がいつまでも続くはずはないことは当然である。「紅葉賀」から、折りに触れて点描されている紫の上の無邪気、無心の澄んだ描写は、藤壺の苦悩や、六条御息所の愛執の深さなどの大人の女の世界とは別次元のものである。少女の無心さは源氏の現実逃避の隠れ家としては絶好のものであったが、真の主体的精神を有する女たちの内心で血を流す如き苦しみの描写と比べれば、讀者に与える感動は異

二人の関係はその始発部において真意を通わすことがなかった(源氏は紫の上に「藤壺のゆかり」について説明しようともせず、彼女の疑問や誤解は全く意に介さない―注20)ことをおさえておく必要がある。この点に留意しながら次に「葵」の新枕前後を検討してみたい。

六 新枕までの道のりと無邪気の喪失

1、新枕までの歩み

年のわりに幼くて困ると、周囲の大人たちに言われ続けた紫の上だが、作者は紫の上が少女から女へ脱皮する過程も所要所に書き込んでいることも見逃してはならない。最近では吉見健夫氏が、初期の紫の上と源氏の和歌の贈答から、紫の上の確かな成長ぶりを詳細に論じてみせた(注21)。

さて、紫の上は「紅葉賀」で一つ年長になった正月にも、難遊びに余念がないが、少納言に「かく御男などまうけたまつりたまひては、あるべかしうしめやかにてこそ、見えたてまつらはめ」(紅葉賀394)と、たしなめられると、「心の中に、我はさは男まうけてけり、この人々の男とてあるは、みにくくこそあれ、我はかくをかしげに若き人をも持たりけるかな、と今ぞ思はし知りける」(同)の部分で、湖月抄では「今までは源の子などのやうにおぼしたる成るべし」と傍注を付けている。ここで初めて紫の上は、源氏の妻としての自覚を持ったということであろうか。しかし、「男をまうける」ことの真の意味を知らぬままであることが、「葵」の新枕の拒否反応の伏線となっている。ただ、二人がいまだ真の夫婦になっていないことは二条院の人々にも知られていなかったらしい。

かく幼き御けはひの、事にふれてしるければ、殿の内の人々も、あやしと思ひけれど、いとかう世づかぬ御添臥ならむとは思はざりけり。(紅葉賀三九四)

この「世づかぬ御添臥」を四年ほど重ねたことが、紫の上はこの後の新枕の激しいショックをもたらすことになる。紫の上は祖母尼の元で、童べたちに囲まれて育て、性的には「おくて」となっても仕方がないような環境である。後宮で父帝について御簾の内の女たちを訪問しながら育った源氏が性的に早熟であったのとは対照的といえよう。さて、その紫の上が初めて見せた媚態は、次のようなものであった。

女君ありつる花の露にぬれたる心地して、添ひ臥したまへるさま、うつくしうらうたげなり。愛敬こぼるるやうにて、おはしながらとくも渡りたまはぬ、なまうらめしかりければ、例ならず背きたまへるなるべし。端の方について(源氏)「こちや」とのたまへどおどろかず、(紫の上)「入りぬる磯の」と口ずさみて、口おほひしたまへるさま、いみじうざれてうつくし。(紅葉賀四〇三)

「全集」頭注では、「入りぬる磯の」の部分で、「まれにしかこない源氏をさりげなく恨む紫の上は、もはや単なる少女ではない」と成長ぶりの表現ととっている。吉見氏も、紫の上が「若紫」の巻で初めて詠んだ「紫のゆかり」を問う返歌が「素朴で幼さ」を感じさせるものであったのに比して、この「入りぬる磯の」を「和歌と関連して成長の度合いがはかられている」(注21)とみる。ちなみにここでの紫の上は十一歳であり、古今和歌六帖の一句を引いたこの箇所は、源氏物語中の引歌使用の最年少の例ではなからうか。しかし、そのような一人前の女君の姿態はつかの間のもので、源氏が夜になって(他の女の元へ)でかけようすると、「姫君、例の心細くて屈したまへり」と頑でない子どもの様子

になってしまふ。そして「やがて御膝によりかかりて、寝入」ってしまい、源氏はとうとう外出を中止する。それを聞くと喜んで起き上がり一緒に食事をしたが、ろくに食はず「さらば寝たまひねかし」と源氏がやはり本当は出掛けてしまふのではないかと不安で、そうはさせまいと子どもなりの精一杯の知恵をしばっている。このあたりは子どもの描写としても大変すぐれていて近代的な感じすら受ける。清水好子氏は「ここに光源氏を引き止める力が具体的に書かれている。葵の上と六条御息所に挟まれて、吐息をついている彼が甦り、生色をとりもどす瞬間である」と、紫の上の「無計算の尊さ」の持つ力を指摘している(注22)。

右のように「紅葉賀」ではいまだ子どもっぽい一面を見せて、源氏を手こずらせた紫の上であったが、次の「花宴」になるとすっかり聞き分けがよくなっている。

見るままに、いとうつくしげに生ひなりて、愛敬づき、らうらうじき心ばへいとことなり。飽きかぬ所なう、わが御心のままにをしへなさむ、と思すにかなひぬべし。男の御をしへなれば、すこし人馴れたることや交らむ、と思ふこそうしろめたけれ。日ごろの御物語御琴などをしへ暮らして、出でたまふを、例の、と口惜しう思せど今はいとようならはされて、わりなくは慕ひまつはさず。

(花宴四三)

傍線部を新大系脚注では「(紫の上は)いつもどおりのお出かけかと、残念に思いだが、今はすっかり慣らされて、無理やり後を追ったりはなさらない。源氏の思いどおりの教育の結果である」とする。また、岷江入楚は「是ははや紫のおとなしく成給けちめを見せてかけり」と注している。紫の上はこの辺から無心な少女期を脱し始めたときとみるべきなのだろう。ただし、どの程度、源氏の外出と訪問先の女たちとの関係を

理解していたかはわからない。紫の上は、源氏を毎日毎晩、自分が独占できないことを彼女なりの経験を通して納得させられた。そして、おとなしく待っていたれば、源氏は必ずまた自分の元へもどってくることもわかり、待つ時間を我慢することも覚えた。その変化を源氏は自分の教育の成果のあらわれと満足したのであろう。

次の巻「葵」のはじめの方で、源氏は紫の上の髪そぎを手づから行い二人であい乗りして祭見物に行き、他の見物人をやきもきさせたりする。

「葵」の終末部に、漸く新枕の描写がある。源氏は葵の上の死後、正日(四十九日)までは左大臣邸に籠もったのち、十月の更衣をすませたしつらいの二条院に戻った。約二か月ぶりに紫の上を見た源氏は「久しかりつるほどに、いとこよなうこそ大人びたまひにけれ」(葵六一)と感嘆の声をあげた。ここで、初めて源氏は紫の上を美しい子どもではなく女君として明確に意識したようである。源氏の視線は執拗で「小さき御几帳ひきあげて見たてまつりたまへば、うち側みて恥ぢらひたまへる様飽かぬところなし」(同)と、少女から脱皮したばかりの初々しい女君らしさから眼をそらすことができないほど魅了されている。ところが、紫の上の方は源氏の心の変化と、その心に芽生えた男性の欲望には全く気付かなかった。「気色ばみたることなど、をりをり聞こえ試みたまへど、見もしりたまはぬ気色なり」(葵六三)源氏はそれとなく実質的な結婚の希望をはめかしたりするのだが、普段は打ては響く勘のよさで応える紫の上は、全然のってこない。性教育めいたものが乳母の少納言らによってなされていなかったのか。あるいは全ての教育は源氏によってなされると紫の上の側近たちは信じきっていたため、その方面が空白のままであったのか。ついに、源氏は紫の上の理解を得られぬままに夫婦の契りを交わした。

2、新枕の衝撃と無邪気の喪失

忍びがたくなりて、心苦しけれど、いかがありけむ、人のけぢめ見たてまつり分くべき御仲にもあらぬに男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬあしたあり。(葵六三)

この有名な部分を玉上評釈では「源氏に安心しきって甘えている姫に手をつけるのは、源氏とても気の毒に思われて、なかなか決断しかねたのだが、ついに新枕をかわしたのである。源氏のためらいがちな気分を示すかのごとく、作者の語り方は、慎重で、まわりくどくもあり、隠微でもある」とする。そしてこの後に紫の上の受けた衝撃の激しさが生々しく伝わってくる描写が続く。

①かかる御心おはすらむとはかけても思し寄らざりしかば、などてかう心うかりける御心をうらなく頼もしきものに思ひきこえけむとあさましう思さる。(葵六四)

この部分原岡氏の「もとより四年の歳月を共に過ごした父とも兄とも頼む人の突然の変貌への驚愕が大きい」(注5)の解釈は誰しも認めるものである。また同氏は、作者が紫の上を「二条院での日々の中にやがて源氏その人への微かにいじらしい憧憬が育まれ始める」という書き方をしなかったため「少女の無邪気は直前まで揺るぎもない」ことを指摘する(注5)が、この設定は新枕直後の激しく動揺し、抵抗する紫の上描写と密接な関係にあり重要な点であると思う。

比較するに、葵の上、臘月夜、末摘等は、紫の上と同様源氏が初めて男性ではなかったのか。なぜ紫の上の如き反応が他の女たちには微塵も描かれないのか。(状況の違い、予備知識の違いなど考慮してもなお一抹の疑問は残る。状況は全く異なるが、唯一の類似する描写は柏木に聞

入された時の女三の宮であらうが、以前別稿に書いた(注23)のでそちらにゆずる。)一体どうして紫の上だけに特殊な状況を周到に用意してことさら唐突に一方的な新枕を描くことに作者は力を注いだのだろうか。少女の無心さに慰められ、活力を与えられた男が少女を女として意識するようになった時、無邪気を容赦なくはぎとってしまうような行動をとった。少女は直後激しく動揺し、男を拒絶するが数年後(賢木十六歳、須磨十八歳あたりから)別人の如く従順で男君を頼り深く愛する女君になり、留守を守る賢明な女主人に変貌している。先にあげたように秋山論文はこの辺の不自然さを指摘し「光源氏のいかなる教育が奏効し、あの子供々々した紫上をしてかくも世俗の困難等を克服する才覚を身につけた重々しい北の方たらしめたのか」(注16)と、疑問を投げかけ十歳から十六歳までの紫の上を「成長する主体的な人間性格としては少しも描かれていない」(前同)とし、ほぼ定説となっているようである。しかし、少なくとも新枕描写に関していえばこの説はあてはまらないのではないか。紫の上が「男をまうける」ことの意味を身をもって知った時難遊びの中の源氏の君は命を失い、少女は源氏の美しい人形ではなくなった。「賢木」以降の紫の上の変化は、この新枕の衝撃の激しさがもたらしたものであり、そこに無邪気の喪失の痛みを読みとるべきでなかろうか。この日を境を紫の上の「子供々々」した面は消え去り、天性の聡明さによって源氏の伴侶にふさわしい能力を身につけていったという風に読めないだろうか。

紫の上の突然の出来事にわななく描写はさらに続く。

②(源氏が)昼つかた渡りたまひて、「悩ましげにしたまふらむはいかなる御心地ぞ。今日は暮も打たでさうざうしや」とてのぞきたまへばいよいよ御衣引き被きて臥したまへり。(略)御衾をひきや

りたまへれば、汗におし漬して、額髪もいたう濡れたまへり。「あなうたて。これはゆゆしきわざぞよ。」とて、よろずこしらへつきこえたまへど、まことにいとつらしと思ひたまひて、つゆの御いらへもしたまはず。(葵六四)

吉岡曠氏はこう解説している。

何の予期も先入観もなく男と結ばれた少女の驚きとくやしさと恥ずかしさと、要するに困惑が、まことに可憐に描かれている。そして女の反発が強ければ強いほど、その「解けがたき御気色」を、男はかわいいとおもう。心身ともに純潔無垢のまま自分の妻になった女をいとおしむ気持がこみあげてくる(注24)。

どちらかといえば源氏の視点に偏った解釈である点がやや気にかかる。このような男女の結びつきは、男性にとっては理想的かもしれないが、何も知らされていなかった女側にとっては痛ましい感じがしてならない。また、玉上評釈では「姫は日頃から利発であっただけに、自分の気持がごまかせない。まして、女にとって生涯の一大事である。しかも彼女の場合、予期せざる大変事である。簡単に気持の整理ができるものではない。」とするが、紫の上が感性豊かな少女であったことが、新枕が彼女に人並み以上の激しいショックを与えたとする見方には共感する。源氏は今までどうって変わってふさぎこんでしまい、うちとけようとならない紫の上にすっかり夢中になって、他の女たちのことなど眼中になくなってしまふほどであった。「新枕の心苦しう」と、一夜も逢わずにいられないという打ち込みぶりであった。

ところで、やや唐突だが紫の上と源氏の長い夫婦生活を通して、夫の妻に対する愛情の高まりを描いた箇所(注25)の双壁をあげると、この新枕直後と「若菜上」の女三の宮降嫁直後ではないかと思う(一夜のほど、朝の

間も恋しく、おぼつかなくいとどしき御ころざしのまさるを―若菜上

六七)。女君にとって、もっともショックや苦悩の激しい時に、男君の

愛情がいやまさるといふ構図が浮かんでくる。その意味でも新枕場面の

二人の内面の食い違いの甚だしさは、作者が明確な意識を持って描こう

とした源氏物語のテーマのひとつではないかとも思えてくる。藤壺は別

格として、物語中で源氏に最も愛された女性といえ、紫の上以外に考

えられないが、紫の上が精神的に激しく動揺し、源氏との間に一種の埋

めがたい溝が生じている時に、源氏は紫の上の魅力を強く感じ、いと

くてならなくなるのである。新枕の描写は、こういう二人の関係をまさ

に男女関係のスタート時に象徴的に描いたものと読めないだろうか。

さらに普通、平安朝の結婚制度では、契りを交わした途端に女の立場

が弱くなり、あてにならない男の訪れを待ち続けるというケースが圧倒

的に多い。しかし、源氏と紫の上は始めから二条院で同居しており、お

ぼこすぎる紫の上は初夜から二月以上源氏を嫌ってうちとけず、源氏の

方は前述の如く熱をあげている。この関係は当時の男女のありようとし

ては例外的なものではないだろうか。こんなにも源氏に機嫌をとっても

らえる紫の上は、その点に関してのみにいえば、まさに理想的な女君であ

ったといえるのかもしれない。しかし「葵」の巻では紫の上の心はとけぬ

ままであった。

御裳着のこと、人にあまねくはのたまはねど、なべてならぬさまに
思しもうくる御用意など、いとあり難けれど、女君はこよなう疎み
きこえたまひて、「年ごろよろづに頼みきこえて、まつはしきこえ
けるこそあさましき心なりけれ」と、悔しうのみ思ひて、さやかに
も見あはせたてまたまはず、聞こえ戯れたまふも、いとわりなきも
のに思しむすばはれてありしにもあらずなりたまへる御ありさまを

をかしうもいとほしうも思されて(葵六九)

吉岡氏はこの部分も、「端的にいえば、女はただ恥ずかしがっているだけ」と解釈し、二人の結婚について次のように述べている。

心身ともに無垢な女と、無垢ということの価値を十分に理解し、享

受することのできる男との結婚―作者は、男と女の結びつきの最も

理想的な形はこういうものであるということ、光源氏と紫上の結

婚を通して提示しているのである(注24)。

果たしてそうであろうか。新枕での生まれて初めての予期せぬ体験で生じたおののきと悲しみの深さを、源氏は真に紫の上の身になって理解しているとは言いがたい。紫の上が汗びっしょりになって、少女から女へ脱皮せざるをえなくなった我が身に気も狂わんばかりなのが、源氏には「をかしうも、いとほしうも思され」というのもどこか残酷な感じがする。源氏はともかく、紫の上にとってこの結婚が真に理想的なものであったというのだろうか。「思しむすばはれて、ありしにもあらずなりたまへる御ありさま」という部分に、無心な子どもの世界から大人の男女の世界へ、自分の意志とは関わりなく移動させられた紫の上の無邪気の喪失の甚だしさが見事に表現されている。

私がこの部分から強く感ずる点は、新枕直後の女の心理および状態をこれほど克明に長々と描いた物語は『源氏物語』以前には全く見ることができないことである。たとえば『宇津保物語』『俊蔭』の兼雅と俊蔭の女との一夜の契りの後なども、紫の上のごとき処女喪失の心のおののきは殆ど書き込まれていない。ただ、それっきり兼雅が訪れない寂しさがかこたれているばかりであった。また、結婚前後の女側の心理を表現した『源氏物語』以前の作品として『蜻蛉日記』があるが、やや大雑把であったとはいえ、一応型通りの求婚の手続きを経ての結婚であったた

め、「ひとたび婚姻が成立すると男女の立場は逆転する。ひたすらに夫のおとずれを待つ日が続く」(注25)と、求婚期間を持たされなかった紫の上のショックの激しさや、源氏を待つ気持より、恥じて厭うさまが強調されている点とは大きな相違がある。この紫の上の新枕後の長期にわたる不機嫌と抵抗を、「自分の気持を整理できずにすねにすねている」(全集頭注)と解釈するのが一般的のようである。しかし、それにしではしつこすぎる描写ではなからうか。私はむしろ、一つの疑うことを知らなかった純な魂が、一気に砕け散って二度と元には戻れないその痛ましき、悲しみを伝えんがために作者が紫の上の心とけいさまで執拗に繰り返したのではないかと考えたい。原岡氏の「無垢に輝き、様々なものへの混沌とした好奇のまなざしをたたえていた少女が、性にまつわる結婚という制度の中に据えられようとする時の、困惑とある種の悲しみ」が、紫の上をめぐる極めて美しく描かれた」とする(注5)読みに賛同したい。そして、逃げた雀の子に涙を流し、雛遊びの中で源氏の君を参内させていた無邪気な子ども時代は過去のものとなって、女君紫の上が誕生したのである。

そこには当然、式部自身の『紫式部集』の始めの歌などから察することのできる童友達とたづぶり遊んだ、利発でいきいきとした少女だった頃を愛惜する気持が込められていたはずである(注26)。冒頭に書いたように少女の無邪気の喪失をこんなにも克明に鮮やかに描いた作品を次に見出すのは近代になって、樋口一葉の『たけくらべ』まで我々は待たねばならなかったのではないかと思う。

- 楓社・平成五年
- 5 原岡文子「紫の上の登場―少女の身体を担って―」『日本文学』平成六年六月
- 6 折口信夫「産育習俗」『折口信夫全集ノート編第七巻』中央公論社・昭和四十六年
- 7 倉田実「紫の上求婚譚の側面」『紫の上造型論』新典社・昭和六十六年
- 8 柳井滋「紫上の結婚」『平安時代の文学―文学編』吉川引文館・昭和五十六年
- 9 永井和子「紫の上―『女主人公の』定位試論―」森一郎編『源氏物語作中人物論集』勉誠社・平成五年、また今西祐一郎氏は(玉鬘、秋好中宮をあげたのち)「紫上にたいしてこそ先ず『親』であり、やがて『男』となるという可変的な関係」と夙に述べている(「寡産の思想」『文学』昭和四十八年八月)。
- 10 原岡文子「『源氏物語』の子どもをめぐる―紫の上と明石の姫君―」『むらさき』第三二輯・平成七年
- 11 川名淳子「若紫の君―絵と雛遊びに興ずる少女―」『むらさき』第二五輯・昭和六十六年
- 12 原岡文子「若紫の巻をめぐる―『源氏物語両義の糸』有精堂・平成三年
- 13 野口元大「『楼の上』の世界」『宇津保物語の研究』笠間書院・昭和五十二年
- 14 藤井貞和「物語の結婚」創樹社・昭和六十年
- 15 松尾聡「紫上―一つのやや奇矯なる試論」『国文学解釈と鑑賞』昭和二十四年八月

(注)

1 佐多稲子が「たけくらべ」解釈へのひとつの疑問(『群像』昭和六十年五月)で美登里の変化の原因を従来の初潮でなく、はじめて客をとる初店(水揚げ)によるとする説を提示して以来、論争が起こったが、現状では佐多説支持者(大岡昇平、野口富士夫、吉行淳之介、沢地久枝、蒲生芳郎)が多く、内容的にも初潮説(前田愛、小森陽一、岡保生)をしのいでいる感がある。筆者も、『たけくらべ』十二章に「冠っきりの若紫も立出づるやと思はるる」と、原文中に少女期の紫の上が明記されている点と、十四章以下の美登里の「憂く恥かしくつしましきこと身にあれば」「美登里はいつか小座敷に蒲団掻き出でて帯と上着を脱ぎ捨てしばかり、うつ伏し臥して物をも言はず」「彼の日を始めに生まれかはりしうの身のふるまひ」等の記述から紫の上新枕との強い関連性を感じる。

なお、紫の上新枕部分の影響を初めて指摘したのは長谷川時雨であったが、(『二葉小説全集』「たけくらべ」の評釈・富山房百科文庫・昭和十三年)にもかかわらず長谷川は初潮説を主張している。また、初潮説が長期間不動であったのは、『たけくらべ』発表直後の『めざまし草』(明治三十九年四月)「三人元語」の幸田露伴の評が絶大な影響力を持ち続けたためと推測されている。

2 未発表―仲田庸幸氏が「子ども時代の源氏には遊びの描写がない」(注3)と指摘するように「桐壺」の源氏は宮中においても、母方の里邸においても「大人の子ども」として描かれている。

3 仲田庸幸「光君及び紫の君と幼児描写の文芸的意義」『源氏物語の文芸的研究』風間書房・昭和三十七年

4 林田孝和「源氏物語主人公造型の方法」『源氏物語の精神史研究』桜

- 16 秋山虔「紫上の初期について」『源氏物語の世界』東京大学出版会・昭和四十六年
- 17 伊藤博「源氏物語の周辺―紅葉賀・花宴巻断層」『源氏物語の原点』明治書院・昭和五十五年
- 18 大朝雄二「紫上論をめぐる―日本文学研究大成『源氏物語I』国書刊行会・昭和六十六年
- 19 倉田実「仮託された心情」注7と同書
- 20 倉田実 注19と同論文に「(髪削ぎでの婚約を仮託した光源氏の働きかけの真意を理解できない)紫の上の様子に対して、光源氏は決して意に介していない点、二人の愛情の内質として確認しておきたい」とある。
- 21 吉見健夫「若紫の君の歌と成長―源氏物語における人物造型の方法としての和歌―」『早稲田大学国文学研究』平成七年三月
- 22 清水好子「紫の上」『源氏の女君』塙新書・昭和四十九年
- 23 拙稿「女三宮論―無邪気の喪失と反復する幼さ―」『瞿麦』五号・平成九年四月
- 24 吉岡曠「紫の上の成長―紫の上(2)―」『源氏物語の世界三』有斐閣・昭和五十六年
- 25 犬養廉 新潮古典集成『蜻蛉日記』解説・昭和五十七年
- 26 清水好子氏は、『紫式部集』が式部の娘時代の「童友たち」との一連の贈答を巻頭に据えている点から、同集において「娘時代がある意味を持った他とは明らかに区切らるべき一時期として意識されていた」とする(『紫式部』岩波新書・昭和四十八年)。